

vol.59 2024 春号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしづく

山とある暮らし

Key Word

- 春 うれしいたより
- 関労かわかみの森
- 柿の葉寿司文化今昔すごろく
- 手作りの再生活動
- 樽丸に学ぶ地域産業の成り立ち
- あの頃に描いた「未来」

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

森と水の源流館

奈良県吉野郡川上村大字迫1374-1
<https://www.genryuu.or.jp>

春



うれしかったより。

令和5年度ふるさとづくり大賞 団体表彰（総務大臣表彰）

総務省ではふるさとづくりへの情熱や想いを高め、豊かで活力ある地域社会の構築を図ることを目的として、「ふるさと」をより良くしようと頑張る団体、個人を表彰しています。令和5年度 団体表彰（総務大臣表彰）に公益財団法人 吉野川紀の川源流物語の「地域の自然や人をいかし、流域をつなぐESDの推進」が、全国15団体の一つとして選ばれました。評価をいただいた点として、「代々受け継がれた地域のおもい、環境保全、教育のすべてをつなぎ、新たな交流を生み出している。県境を超えて、山から海まで流れる川の流域のつながりを構築しており、持続可能な未来をつくるための貴重な事例である」との審査員コメントがあり、たいへんうれしく思いました。

環境省「環境教育・ESD動画100選」に選定

持続可能な社会を実現するためには、現代社会における様々な問題を自らのこととして主体的に捉え、取り組むことが求められます。そのような問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす社会づくりを目指して行われる教育が、環境教育・ESDです。その実践のヒントになる動画に「森と水の源流館ESD授業づくりセミナー」の取組みを紹介する作品が選定され、環境省のサイトから広く発信されています。評価をいただいた点として、「源流である川上村のことを知ってもらいたいという熱意が伝わる。教員がまずは源流を体験する。そして、専門家のサポートのもと、源流と暮らしとのつながりを教育プログラムとして構築していく仕組みが素晴らしい」との審査員コメントをいただきました。

設立当初からの活動がESDによって価値化されその取組みをみんなが共有してきたことを評価いただきました。



ESD (Education for Sustainable Development)
「持続可能な社会の創り手を育む教育」

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長 尾上忠大



関西電力労働組合

大阪南地区本部

執行委員長

なかお さとし
中尾 学史さん



大阪市住之江区の中尾さんの職場を訪問したのは1月末。話題は元日に発生した能登半島地震に。関西電力送配電ではすぐに復旧支援に現地へ。そして労働組合としても直後から募金活動の実施のほか、今後も現地のニーズに応じたボランティア活動を展開できればとのこと。毎年どこかで起こる災害。全国の電力企業のネットワークとノウハウをいかした支援ボランティア活動を行う労働組合。「阪神淡路大震災の時に

いただいた全国からの応援への感謝も忘れない。決して目立つことはないが、エネルギー産業に携わる者として貢献したい。」そんな強いおもいを持つみなさんが川上村で10年以上も森林保全活動を続けられています。

川上村での活動のはじまりは

平成16年に関西電力労働組合の50周年を契機に「関労の森づくり」をスタート。その後順次、各地区で森林活動のフィールドを設定することとなり、大阪周辺で活動できる森林を探していたところ、「縁があり、

本店地区と合同で、平成24年4月に川上村

と「森林保全活動に関する協定」を結びました。「水源地の森」に隣接の「源流学の森」内に1畝の「関労かわかみの森」を設定し、除伐作業を中心に行っています。コロナ禍や、それまでも台風の影響などで、予定どおりにはいかないこともありましたが、川上村や森と水の源流館による調整のおかげで、工夫しながら活動ができています。

エネルギー産業に携わる者として

森林環境の保全に貢献したい。【関労かわかみの森】

組合員のみなさんにとって

私もそうですが、参加する組合員には自然好きの人が多く、まず川上村の大自然に感激しています。同時に予想以上の自然の険しさにも驚く場面があります。1泊2日で「水源地の森」を一目見た後、人工林での間伐や整理の手伝いとともに、二次林の「関労かわかみの森」の除伐作業がいつもの

メニューです。他の地区の森づくり活動と比べて私たちの地区の活動は、かなり厳しい地形の中で本格的な森林活動だと言われることがあります。(笑)

活動を終える頃にはクタクタになります。この活動では、普段は接点のない職場や地区の仲間と共に汗をかき、そして夜には食事をしながら語り合うという親睦を深めるよい機会となっております。連帯感の醸成につながっています。それを山深い、静かで美しい星空の下でできることが素晴らしいです。コロナ禍で、やむなく実施を見送っていた間も、組合員から再開を期待する声が上がりました。また体験をした先輩から勧められて参加したということも聞きまです。いっぽう森と水の源流館のスタッフの方からは、普段の仕事のスキルや体力をいかしてもらって、「体験」のレベルではなく、

とても作業効率が良いと言っていただきます。

伝えたいことは

組合員には、参加を呼びかける際に、川上村という場所との関係について伝えます。川上村の「川上宣言」と、きれいな水を守る「水源地の村づくり」に取組むこと、また大滝ダムのことや以前は村役場の並びに関西電力の出張所があったことなどから、

自分たちとの関係性や役割について考えて参加してもらっています。そして現地での活動を通じて、樹と水と人のかかわりについて体感し、森林保全の大切さを伝えたいと思っています。

これからの活動の方向は

最近では森林内だけでなく、集落の貯水槽や道路の清掃作業にも携わらせていただいています。いつも地元のみなさんにお世話をいただき、人々の温かさに触れています。これからも地域とのつながりを大切にし、さらに多くの組合員にこんな地域があることを知ってもらいたいと思います。また地元の人々にも、私たちの活動について知っていただければありがたいです。



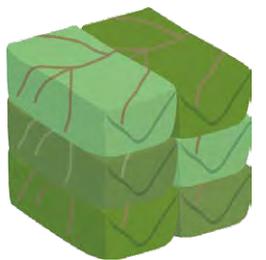
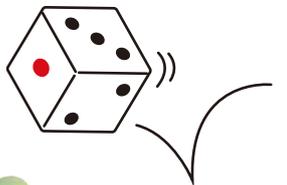
「関労かわかみの森」での活動

平成24年開始当初(写真)は鬱蒼としていた背景の森も、現在では林床に日射しが届く明るい森に整理されている。



柿の葉寿司文化 今昔すごろく

川上村で、「柿の葉寿司」が暮らしの文化として育まれた理由・今なお営みとして引き継がれている理由



日本遺産構成要素

川上村だからこそその食文化

スタート

爽葉

傷みややすい鯖を塩でめて保存性を高め、貴重な米を酢で抗菌し、柿の葉で包み乾燥を防ぎ、重しをおいて空気を抜き発酵を促す。川上村ならではの立地特性と保存食の知恵を活かした郷土料理が「柿の葉寿司」である。



1回休み

青葉

熊野からの険しい道のり
土倉庄三郎翁が計画し、明治20年に完成した東熊野街道は国道169号の原型となった。厳しい道だが、旅人をはじめ物流の軸となり貴重なルートとして、各地の物資を運ぶ商人が往来し、熊野灘で獲れた鯖が塩漬けにされ川上村に運ばれてきた。

田んぼが無いから米が大切！

川上村は急峻な山々のわずかな平坦部に集落があるため、田んぼがほとんどない。その山々を越えて運ばれてきた貴重な米を、村民は大切に食した。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

正岡子規が詠んだように、奈良は柿の木の実を採る、干し柿にする、柿渋を使うなど重宝した。防腐剤がなくても長持ちする柿の葉に気づく暮らしの知恵に改めて敬服する。

3つ戻る

濃葉

米作に適さない土地柄であるが故に、環境に合う加工食品を作り、食生活を充たしてきた。そして保存効果や殺菌効果が高いとされる柿の葉を利用した寿司を作る文化が形成され、吉野川沿いでは「柿の葉寿司」が今に伝わっている。*

1つ進む

青葉

体験から担い手へ
「柿の葉寿司の里・かわかみ」では、「柿の葉寿司」に興味・関心をもってもらおうと様々な体験プログラムを企画・実施している。古民家を活用して、あの頃の雰囲気を感じていただいたり、店主を講師に招いたり工夫は様々。そして担い手育成講座を企画。本当に担い手募集中、是非ご参加を！



あなたのお気に入りどれかな？

1つ進む

濃葉

アユの解禁日
六月のアユの解禁日、役場は休みになり早朝から釣りに出掛ける。昼になると家族みんなが川原に集まり、一杯飲みながら、手作り「柿の葉寿司」を楽しんだ。

*日本遺産ポータルサイトを一部引用し作成

このままではもったいない

「柿の葉寿司」って本当に手間がかかる。後継が育っていない現状が続くと口承の味が途絶える店もでてくる。このままでは、川上村だからこそその食文化が失われてしまう。

柿の葉寿司の里・かわかみ

1回休み

店のこだわりの味を、あの頃みたいに食べ比べしていただきたい”

と村内の柿の葉寿司店のみんなが考え、「柿の葉寿司の里・かわかみ」を設立した。10個入りパックに10種類の「柿の葉寿司」を詰めた食べ比べ弁当を販売したが手間が大変で、現在は各店2個入りパックとして、好みの店舗のものを組み合わせわせてお買い上げいただく形で販売中。2個入りは食べ比べるのに丁度いいと好評で、各店主の様々なこだわりが口の中にドハマりとなって広がる。



柿の葉寿司の里 探索MAP

こだわりと愛情がこもった川上村の柿の葉寿司。自然がたっぷりの美味しい毎日。



家庭の味が店のこだわりに

10年程前、川上村の西の玄関口には10軒あった柿の葉寿司店。高齢化と後継ぎ不足で閉店する店もあったが、お母ちゃんの横で作っていた頃を思い出し、店を始める方も！季節に合わせて塩や酢加減・水の量・押す強さなどを変える口承の味を活かしつつ、物流手段の変化に伴い各店主が鯖や米を吟味し、全国から選り抜いた逸品を使う。これが各店のこだわり！

家庭から大衆へ

大台ヶ原へと向かう多くの観光客に何か土産にできるものがないかと考え思いついたのが、作りなれていた「柿の葉寿司」。

1つ進む

紅葉



懐かしい母の味伝えたい

お母ちゃんの横で見て、一緒に作っていたあの頃の「柿の葉寿司」。一日500個作るのは当たり前。だからこそ、やさしい手ざわりと口承で覚えている郷土の味。自分好みにアレンジしてみても、お母ちゃんの味はやっぱり美味しい。家の「柿の葉寿司」が一番好き。子どもは何個も食べ、こうしてまた伝えられていく。

1つ進む

紅葉

子どもの頃食べた思い出

子どもの頃食べた「柿の葉寿司」は塩も押しも強く、何日間も保存したのも食べた。塩辛い思い出しかないし、鯖や米が黄色くなっても、茶粥に入れてまで食べた。

夏のごちそう「柿の葉寿司」

川原に集った家族や親戚たちは、各家庭の「柿の葉寿司」の食べ比べをして楽しんだ。若葉で包む「柿の葉寿司」は、アユの解禁日をはじめ夏祭りなどハレの日のごちそう。今でも思い出とともに、昔話に花を咲かせる。

さて、今回は—
いきいき輝く
活動をご紹介
のみなさんと

NPO法人 山野草の里づくりの会

手作りの再生活動

大和高原の一角、大和川の源流である桜井市三谷に残された農地や山林を、ボランティア活動によって復旧整備を行い、営農や薪炭利用をおとして保全活動をしているのがNPO法人山野草の里づくりの会です。奈良市内から車で1時間、最寄りの市街地からでも30分。交通の便が良いとは言えませんが、この地に魅力を感じて奈良県内外の市町村から通う50歳代〜80歳代の方が中心となって活動を支え、かつて日本各地で見られた原風景「里山」の再生に取り組み、夏のホタルや赤いソバの花などの季節の楽しみを満喫できる憩いの空間を創り上げています。

令和5年9月、山野草の里づくりの会はNPO設立20周年（発足から23年）を迎えました。できるところからコツコツと。少しずつ整備が進んでいくうち、奈良県では希少となった山野草や生き物たちが姿を見せるようになってきました。

里地里山を活かし、
源流を守る担い手づくり

里山の自然に癒されながら地道な活動を続けてきた結果、山野草の里は平成27年に環境省が選定する生物多様性保全上重要な里地里山500に選定されました。この重要な里地里山を保全する担い手を育成するため、平成29年度から奈良県森林インストラクター会の協力を得て里山保全ボランティア養成講座を開講し、新たな仲間作りにも挑戦。この取り組みが地域環境保全功労者として令和4年度環境大臣表彰を受賞しました。会員同士の交流が元気の源。これからも力を合わせて重要な里地里山を守っていききたいと村上理事長は語っていました。

村上理事長からのメッセージ

里山で汗をかくと気分爽快です。
里山が美しくなり気持ちも晴れ晴れです。
ホタルの棲む田んぼで「お米づくり、農業を使わない野菜づくり、持続可能な暮らしのスタイルを目指しましょう！」

村上秀夫

山野草園内マップ

1月 クロガリ整備
冬の間にクロガリ(農地に隣接する土手)の草刈り。ここは山野草や山菜の宝庫です。

2月 薪づくり
廃伐材から薪を作って、キャンプ場に届けます。

3月 シイタケ菌打ち
広葉樹の廃伐材はシイタケ菌場に活用します。

4月 粉篩き
水につけ発出した種もみを篩きつき、まづくりスタート。

5月 田植え
コロボシ草、高穂えんを播き、水田で稲を育てます。

6月 ホタル
ホタルの観察会を開催。ゲンジボタルやヘイケボタルと一緒に見ることが出来ます。

7月 果樹園・栗園ほか草刈り
夏は草刈りが大仕事です。

8月 ソバの種まき草刈り
赤い花のソバ(高穂えん)の種をまきます。

9月 栗拾い
脱穀機を使わず、20本の栗の木を育てています。

10月 稲刈り赤いソバの花
ソバの花が実を、収穫の季節です。

11月 ハーベスターで脱穀
稲刈り後(ほごかけ)、天日干し後、ハーベスターで脱穀作業をします。

12月 餅つき
1年の締めはお餅つき。つきたてのお餅を、頂いていただきます。

時とつながる

樽丸に学ぶ地域産業の成り立ち

樽亮木材 春増 薫さんのお話から

森林所有者から立木を購入し、伐採・搬出をして市場や製材所へ木材を納める

素材生産業から製品加工業の樽丸づくりへ参入した春増薫さん。持ち前の探求心から、吉野杉による樽丸文化の奥深さを学ぶことになる。時代の変遷とともに容器の素材が金属やプラスチックに代わる中、樽や桶は今もなお一定の支持を得ている。地域産業として残る必然性が見えている以上、現役で樽丸づくりを続けていくと春増さんは意気込んでいる。

樽丸林業の起り

江戸時代には年間120万樽もの酒樽が神戸の灘から江戸へ運ばれていた。平均10日間かかる樽廻船による海上輸送において、「目減りが少ない」「腐りにくい」酒樽が求められた。そして輸送中に木香が日本酒に移ることで風味が増したので、「香りが良い」木材が使われるようになる。節が少なく均一な木目で香り高い吉野杉は見事にすべての条件を満たしていた。酒樽は吉野杉の赤い心材だけで作るよりも、芯材と辺材の境目で作った方が見栄えが良く日本酒が腐りにくかったため、外側が白、内側が赤の「源平」とよばれる樽丸が好まれ、往時の建築材よりも厳しい条件を満たさなければならなかったが、密植・長伐期・多間伐という吉野林業の施業体制を確立させることにより、需要に対応した。併せて、樽丸の現地加工による供給の効率化を図るため、伐採・加工・搬出の分業が確立し、吉野林業は樽丸林業と呼ばれるようになった。

受け継がれる地域産業

林業従事者にとって、「晴れた日は山に行き、雨や雪の日は休み」という慣行がある。春増さんは雨の日の作業を樽丸づくりに求め、収入と労働体制を整えようとしたが、人々を巻き込んでの体制づくりは出来なかった。参入当時は樽丸職人が減っている最中であつたが、同じ集落に住む樽丸技術を持つ知人が替同してくれたことや、樽丸づくりが村で盛んだったことなど諸条件が好転し、かつての技術、腹当てや織などの道具を引継いだ。

樽丸に学ぶ



吉野林業は需要の変化に柔軟に対応してきたからこそ独自性を持って発展してきた。現在では奈良県の調査により証明されている吉野杉の抗菌作用であるが、科学的根拠のない時代の経験則が必要を生み出し、川上村を樽丸生産の一大拠点へと成長させ、地域の暮しの礎となったことは必然と言っても過言ではない。

奈良県内でも数軒しか残っていないが、地域産業の技術と歴史の積み上げが支えとなっている証拠に、容器としての樽に根強く残る需要が挙げられる。春増さんの下で学ぶ後継者は、個人用の味噌桶など道具としての需要にチャレンジしている。樽丸は変化する需要に今もなお応え続けているのだ。



事業レポート

あの頃に描いた「未来」は「いま」となりました

公益財団法人吉野川紀の川源流物語
事務局次長 高田 裕市

川上村が水源地の村づくりに取り組んで来
年30年を迎えることを「存じでしたか?村に
「二つのダムが造られるなか」「ダムで栄えた村
は無い」という言葉通りにならないよう、「未
来」を想い、村づくりに取り組んできた方々に
「出会い・想いを紡ぐ」事業に「この一年取り組
んできました。そして、我々が担うべきことを
学ぶ機会になりました。「水源地の村づくりの
こと」「26大字のこと」など郷土を想つことか
ら始める大切さを事業にも活かしていきます。

出張源流教室

(森林環境学習「学べる屋台」)

10月~1月

森と水の源流館3階「ふしぎと出会
うコーナー」で展示している「学べる屋
台」は、出張源流教室で実際に触りなが
ら、森と水のはたらきを学べる教材です。
コロナが5類に移行したのを契機に再開
し、奈良県内で3校(約90名)、三重県
内で1校(約650名)を対象に体験学
習を実施しました。児童は広葉樹や針葉
樹の標本を手に持ち、重さ・肌触りなど
を比べ楽しんでいました。また、「間伐
材で作った割りばし」を持ちながら木を
使う大切さを体感していました。「屋台

は次いつ来るの?」
と先生にたずねる見
童もいたようです。
出張源流教室をきつ
かけに、森に興味を
もち水源地の大切さ
を考える機会になれ
ばと思います。



井光地区民俗調査

(京都大学農学部森林科学科)

12月15日

昨年度から井光地区に伺い、かわかみ
らいふ号に買い物に来られる住民に昔の
写真を見ていただきながら、「祭り」や
「地芝居」、「地芝居衣装のどよぼし」「渡
り」「千本つき」など、かつての暮らし
の話聞き取りしています。今年度は、
京都大学農学部森林科学科から実習とし
て6名の学生と先生に来村いただき、20
数名の住民が買い物の合間に、「これ〇
〇やな」「昔ここに〇〇があった」など
学生相手に思い出話に花をさかせていま



した。この様子に、かわかみらいふの方々
は驚きつつ、地域づくりにつながる取り
組みだと口々に言われていました。今後
も調査活動を進めながら、かわかみ源流
ツーリズムや源流人会の皆様と共に、誇
りある地域資源を活用につなげていきたく
いと思います。

水源地の村づくり
まだまだ知らないことばかり!



水源地の村づくりの取り組み拠点とし
て整備された森と水の源流館が、丹生川上
神社上社跡、龍のモニュメント、丹生川上
神社上社と概ね直線上に配置されている
ことを水辺のアクティビティ事業(石写真)
を企画する際に知りました。辰年にあやか
つて、龍のモニュメントの問い合わせが多
く寄せられています。湖面から見える龍の
モニュメントの発信も今後の課題です!

当館にきて1年になります。もっともっ
様々なこと知り、水源地の村づくりに活かす
資源を、皆様とともに掘り起こし、一緒に
活用にかえていきたいと思います。

源流人募集



源流人とは かけがえのない水を生む源流の自然とそこから
海や都市へとつながる様々なものを愛する人です。



源流人会とは 集い、話し、学び、遊び、考え、
触れ、交流し、参加し、喜びを
分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこ
うとする会です。

2024年度入会特典
川上村ポケット図鑑

※写真はイメージです。

年会費 個人 2,000円
家族 3,000円
学生 1,000円
団体 10,000円

郵便振替
00940-1-331163

もりもり
森守募金



にご協力ありがとうございました。

令和4年度は、196,475円の森守募金をお預かりし、環境保全啓発のためのパンフレット増刷や看板の製作を行いました。

源流域の環境保全は
みなさまの善意に支えられています。
ひきつづき、ご協力をお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

